

●秘伝のからくり花火

都城市など旧薩摩藩領内では旧暦の六月、各地の鎮守の杜（もり）で灯ろうを奉納する祭りが行われる。これが「六月灯」で、七月になると毎晩のように花火が打ち上げられる。

由来は、島津家十九代当主・島津光久が鹿児島の上山寺新照院の観音堂を建立し、仏参りのとき多くの灯ろうをともさせた。檀家（だんか）も灯ろうを寄進し、にぎわったのが恒例となり、広がった。もう一つは安貞元（一一二七）年六月十八日、初代当主島津忠久が鎌倉で亡くなり、この日を「御忌日（ごきじつ）」と言って、島津家や家臣が供養のため、灯ろうをともしたと伝えられている。

また、旧暦六月は人や牛馬の病気が流行、田畑に病害虫が発生する時期でもある。かつて、毎晩灯明をあげ、無病息災を祈った「御灯明あげ」が六月灯になったともいわれている。現在、

関之尾町や下長飯町の六月灯は馬頭観音にジャンカン馬蹄を奉納、牛馬の息災を祈願している。

六月灯は毎年七月二日、平江町の秋葉神社から始まり、三十日の岳之下町・兼喜（けんき）神社で終わるのが以前からのしきたり。二〇〇二（平成十四）年七月には、市内百十八カ所で行われた。これは昔からほとんど変わることがないという。

かつて六月灯には、からくり花火が奉納され、村の若者たちが秘術を競った。野々美谷町・諏訪神社の「流星」、高木町・南方神社の「千灯笼（ろろう）」、山田町・花舞神社の「ちぎり牡丹（ぼたん）」、上水流町・科長（しなが）神社の「からくり花火」など。火薬の材料や調合など、花火の作り方は集落の中でも一部の家に限り、それも長男だけに口伝や記号を交えた文書で伝え、外部に漏れないようにした。



六月灯での花火。昔の風習を今に伝える

現在伝承されているのは科長神社のからくり花火。社殿を囲むように境内の樹木に長さ二十メートルから三十メートルの麻ひも十四、五本を巡らす。ひもには竹筒を通し、それにロケット花火が付けてある。点火すると勢いよく飛び出し、次のロケット花火に着火する仕掛けである。

ロケット花火が境内を何周か回ると、最後は「滝花火」（昔は「センツロ火車」であった）に着火、境内は真昼のように明るくなり、さらに連発の打ち上げ花火が上がって祭りは最高潮に達する。

家々では灯ろうに武者や野菜を描いて子供の健康や豊作を願う。出店も連なり、六月灯は都城市民の暮らしにしっかりと根付いている。

前田博仁